大正区制８０年と沖縄ー沖縄を唄う・映す・語る
大正区からみる沖縄の歴史・文化・生活

【日　時】　２０１３年 ３月３０日（土）　午後 １ 時 ～ 午後８時
３１日（日）　午前１０時 ～ 午後７時
★ 講演会：1,000円　☆ 展　示：無　料

【場　所】　大阪沖縄会館４階　市バス「大正区役所前」下車徒歩３分

【内　容】

講　演	：	石原昌家氏（沖縄国際大学名誉教授）	３１日午後３時
語　り	：	大正区にかかわるウチナーンチュ	３１日午後４時
はなし・映像Ａ	：	寺田吉孝氏（国立民族博物館教授） 「大阪のエイサー思（うむ）いの交わる場」 （７６分２００３年）	３０日午後３時
映像Ｂ	：	クブングァー、北恩加島の風景と生活 「空がこんなに青いとは」（１９７０年） 「筋と通」（２００９年） プライベートフィルム	３０日午後５時半 ３１日午前１１時
展示・写真	：	大正区の沖縄人の生活風景	
う　た	：	あんり＆もろ 移民・出稼ぎへのおもいをうたう	両日午後２時半
フィールドワーク	：	先人たちの生活の足跡をたどる 集　合　大正区ｺﾐｭﾆﾃｨｰｾﾝﾀｰ１Ｆロビー 募集人数　２５人（事前予約必要）　※参加費　５００円	３０日午後１時

◇石原昌家氏　プロフィール◇

台湾宜蘭市生まれ。戦後、沖縄県首里に戻る。大阪外国語大学、大阪市立大学大学院を経て、沖縄国際大学で教鞭をとる。そのかたわら、沖縄返還後は戦跡のガイドも務める。

著書　『虐殺の島―皇軍と臣民の末路』、『うまんちゅぬすくぢから―アメリカのカイザー資本・琉球セメントと闘った民衆の記録』、『大密貿易の時代―占領初期沖縄の民衆生活』、『証言・沖縄戦―戦場の光景』、『沖縄県知事の代理署名拒否裁判―共に考え・行動した記録』、『空白の沖縄社会史―戦果と密貿易の時代』、『沖縄の旅・アブチラガマと轟の壕―国内が戦場になったとき』

【主　催】　大正区沖縄研究会

【問合せ】　関西沖縄文庫　０６－６５５２－６７０９　（大阪市大正区小林東３―１３－２０）

「オキナワ」あるいは、「大正区」とわたし

上地美和

子どもの頃、年に一度、祖父母がお土産をたくさん抱えて沖縄からやってきた。その中に私の大好物のヒージャーがあった。祖父がヒージャーも潰して持ってきてくれたのだ。香ばしく焼けた皮付きの刺身は今も大好きだ。ヒージャーの刺身はお皿に山盛、お汁も好きなだけ食べることができた。

家でも時々、ヒージャー汁を炊いた。ヒージャー汁の匂いを知らない近所の人が、あまりの臭いに驚き、母に何を炊いているのか尋ねたそうだ。一度分かると、ヒージャーを炊いているときは「また、炊いてるね」と声をかけられる。「今日、隣はカレーやね」というような、たわいもないご近所の井戸端話のようなものだった。

しかし一方で、思い出すことがある。母は忘れているかもしれないが、子どものころ母から「他所で山羊食べてるって言うたらアカンで」と言われたのだ。私は「なんでやろう？」と思いながらも、深く考えることもなかった。もっともとりたてて人に言う機会もなかった。しかし、今ではこの謎も解けたように思う。ある在日コリアンの知人から「学校では在日を隠してたのに、友達の弁当のおかずを見て、なんやあんたも在日やったんやって、打ち解けたことがある」という話を聞いたからだ。

大人になって、沖縄料理の居酒屋に行くことが多くなった。そこで出てくるヒージャーは、私の記憶のヒージャーとはどこか違う。きれいにスライスされたヒージャー刺身が整然とお皿に並べられている。上品で値段もそこそこする。ブツ切りでお皿にてんこ盛りのヒージャーとはやっぱり違うように思えてならないのだ。そして子どもの頃、ヒージャーをお腹いっぱい食べることができたのはとても幸せなことで、いろんな意味で贅沢だった思う。今の大阪ではなかなか経験することができない「オキナワ」なのかもしれない。

数年前、大正区の「オキナワ」が気になりだして、関西沖縄文庫の戸を叩き、そこに集う方々と交流するようになった。そこで、私は様々な「オキナワ」を知ることになった。先輩方から聞く話は新鮮で、私は色々な「オキナワ」を、そして色々な「大正区」を学ぶことになったのである。そして、先輩方の経験を聞くうちに、みんなの「オキナワ」、みんなの「大正区」を垣間見ることができたように思う。特に私が興味をもった「オキナワ」は、沖縄スラムと呼ばれていたクブングヮーの話だ。クブングヮーで生活した思い出にはみんなの「オキナワ」、みんなの「大正区」が凝縮されているように思えたからである。

沖縄研究者の石原昌家先生は、1979年から1990年代にかけて、関西に住む、色んな世代のウチナーンチュにインタビューをしている。膨大なカセットテープには、明治生まれの人も含まれており、昭和初期の大阪や大正区の様子が映し出されている。もうお話を聞かせてもらうことができない世代の方々もいる。かといって、大正区の諸先輩方の話も充分に聞くことができていない。沖縄の日本への「復帰」40年、大正区の誕生80年という区切りをきっかけに、沖縄の人たちが大正区で歩んできた道を見直してみたいと思う。

ウチナーンチュと大正区の100年 ㊤

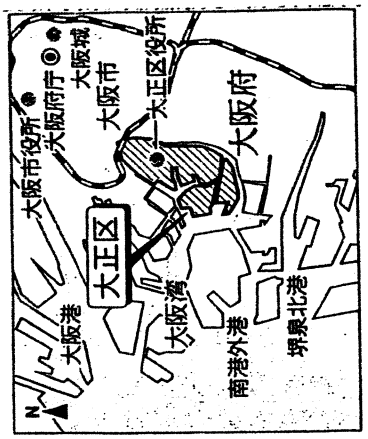
～与那原綱がつなぐ思い～

人口約6万8千人の4分の1が沖縄にルーツを持つといわれる大阪市大正区。区によると、大正時代初期に県人の移住が始まって約100年、定住化が始まって約80年になる。区制80年、沖縄復帰40年を記念して、大正区は8日、与那原大綱曳を千島公園グラウンドで行う。大綱曳を前に、県人の足跡や現在の思いを追った。

（南部総局・内間健）

▼ことば

大正区　大阪市24区の一つで市の南西部に位置し、大阪湾に面する。面積は約9.4平方キロ。江戸初期は三角州の点在する河口で、後期に新田開発で現在の形となった。明治期に紡績や木材加工、鉄鋼所や造船所が造られ、阪神工業地帯の重工業集積地に。区域は1897年に大正区として発足した。1932年に大正区編入。



区で育った金城勇さん(61)はそう語る。同じ県系の金城肇さん(59)が主宰し、沖縄の文化を発信する「関西沖縄文庫」を窓口にした人権教育で、大正区の沖縄の歴史を語るガイドを務めている。

工業地に職求め移住

関西最大の沖縄集落形成

第1次世界大戦（1914～18年）末期から、紡績などで急に工業化した関西の工業地帯は「ジャパン地獄」といわれ、生活難にあえいでいた沖縄から、多数の労働力が流れた。

「沖縄の人が大阪に来たのはな、交通と労働、住居や」。大正区の中で、ウチナーンチュが固まって住んでいるのが、逆に日本人が米国で固まって住んでいるのはなぜなのか」。勇さんは問いかける。

「それは、コミュニティーでもあるが、差別に対する防衛でもある。固まって住むことの効果はいくつもある。関西で最大の沖縄集落が大正区」

■　■

大正期から沖縄―大阪間には定期航路があり、交通の便が良い。また「大正区は、江戸時代から河口を埋め、向かって干拓した新しい土地で、沖縄の人が入ることができた」と説明する。

■　■

西風原町出身の勇さんは1955年、4歳の時に両親と兄弟3人の一家で大正区へやって来た。父親が戦前、同区で出稼ぎをしていた経験があり、仕事を求めて家族で移住した。同区育ちで「沖縄2世」という認識だ。

高校生や大学生のころ、72年の沖縄の本土復帰を前にした闘争にも関わった。しかし、復帰を機に政治（ローカル）だけでなく、生活の場から沖縄をとらえ直そうと、沖縄から関西に集団就職してきた高年の支援や、区内にあった劣悪な生活環境改善の問題に取り組んできた。

カイト役を務めるのは「大正区の歴史でなく、区でウチナーンチュが生きてきた歴史を知ってほしいから」だ。「なぜヤマトの中で、ウチナーンチュが固まって住んでいるのか、逆に日本人が米国で固まって住んでいるのはなぜなのか」。勇さんは問いかける。

「それは、コミュニティーでもあるが、差別に対する防衛でもある。固まって住むことの効果はいくつもある。関西で最大の沖縄集落が大正区」

■　■

復帰2年後の74年、勇さんの両親は、大正区生まれの妹を連れて沖縄に戻った。が、勇さんは「1世は出稼ぎだから帰れるが、2世は『生活圏』がある」と、区に残った。両親の帰郷は、勇さんにとって沖縄に「実家」ができ、故郷がより身近になるという効果をもたらした。

沖縄に帰るたび、空の上をくりが飛んだり、戦闘機がごう音を響かせたりする光景を目にする。大正区での自らの体験も重ね合わせ、「沖縄では基地は政治問題というより、生活・暮らしの問題。今のオスプレイも同様」と肌で感じる。

子ども時分に大正区であった沖縄芝居や沖縄角力大会を今も覚えている。与那原大綱曳も「子どもたちは大人になっても、ずっと覚えているんだろう。ふるさとを思い出して、沖縄にとどまってくれたら」と期待している。

1947年に撮影されたという地図で、かつての大正区の様子を説明する金城勇さん（右）＝大阪市大正区の関西沖縄文庫

3月30日、31日に大阪沖縄会館で

昨年、大正区制八十年・沖縄復帰四十年を記念して「ちゅら・綱・エイサー祭」などさまざまなイベントが開催された大正区で、改めて関西のなかの沖縄・ウチナーンチュを多角的に捉えて考えようという催しが、三月三十日(土)、三十一日(日)の両日に大阪沖縄会館で開かれます。

会場では、沖縄を離れて出稼ぎや移民に行く人の心情や大阪の地名などを詠み込んだ民謡を演奏し、関西の沖縄・ウチナーンチュを描いた映像の上映、沖縄関係の写真パネル、戦前の大正区の地図・年表などの展示を行ないます。

三月三十一日(日)午後三時～五時には、関西で多くの人々の聞き取り調査をした経験がある沖縄国際大学名誉教授の石原昌家さんの講演会もあります。

●3月30日(土)午後1時～午後8時、3月31日(日)午前10時～午後7時。

●展示は入場無料、講演会は1000円。

●大阪沖縄会館は地下鉄・JR環状線大正駅からバス大正区役所前下車徒歩3分

●詳細は☎06(6552)6709関西沖縄文庫へ。

榎樹コピー

沖縄タイムス

27 ひと・まち 1版 2012年(平成24年) 9月 7日 金曜日

違い乗り越え共生模索

ウチナーンチュと大正区の100年 ㊥

～与那原綱がつなぐ思い

「関西沖縄文庫」拠点に

街を歩けば、沖縄で見慣れた名字や琉球料理の看板などが多く目に付く大阪市大正区。その中で、金城馨さん(59)が主宰する関西沖縄文庫は、沖縄関係の書籍や映像など約8千点を所蔵、「沖縄の空気・空間」で満ちた場所だ。1985年に開設。人と人とを結びつけ、沖縄文化を発信する拠点ともなっている。

ある時、沖縄戦を体験した県出身のお年寄りが突然訪ねてきて、戦争体験を語りだしたことも。「年齢・世代関係なく、いろんな人が自分の思いをはき出せる場になれば。空間という意味が重要なのでは」

■ ■

それは、金城さんも関わり、75年に沖縄出身の青年で結成した「がじまるの会」にも通じる。集団就職や単身で沖縄から関西へ渡り、生活習慣の異なる「ヤマト社会」に悩むウチナーンチュを支え活動してきた。

「ウチナーンチュとしての誇りや自覚をしよう」と2004年、「がじまるの会」が毎年区内で開いているエイサー祭りに、与那原大綱曳を招いた。区で暮らす県出身のお年寄りが「後生の土産ができた」と感激するなど、成功を収めた。

8日に開かれる今年の祭りには、大正区が初めて、共催として入り、区制80周年・沖縄復帰40周年記念「綱・ちゅら・エイサー祭」と銘打つ。

金城さんは、いずれの大綱曳とも事務局として先頭に立ち、与那原町や行政側との折衝を重ねてきた。特に、今回は初めて行政との共催となることで「大正区人口の4分の1の沖縄人と4分の3のヤマトンチュが、与那原大綱曳を共有する」と意義を語る。

さらに双方の「違いや溝をも挟みながら、それぞれの住民が、思いを込めて引き合う中で、熱気が生まれ、大正区の新たな力を創り出す」と考える。大阪で生きるウチナーンチュとして、「違っていながら受け入れる、〝異和共生〟という、つながる方法を模索したい」

「綱・ちゅら・エイサー祭～与那原大綱曳in大正区」に向けて、打ち合わせをする金城馨さん(右)と上地美和さん＝大阪市大正区・関西沖縄文庫

■ ■

文庫を通し若い世代も、それぞれの沖縄像や大正区像と向き合っている。今帰仁村出身の上地美和さん(37)は2歳の時、出稼ぎに来ていた父の呼び寄せで、母と弟と一緒に大正区に移り住んだ。曽祖母のきょうだいが大正時代に出稼ぎで大阪に渡り定住しており、自身を「第4世代」と語る。

大阪大学大学院に在籍していた06年には大正区を研究で取り上げた。昨年、拠点を沖縄に移し、大阪と行き来するが「沖縄に祖父母がいなくると、地縁血縁も薄れていく。大正区の子どもたちに、沖縄との交流の機会があったらいい」と思う。さらに自らを含め「沖縄との関係をどうとらえるのかが、大阪のウチナーンチュとして今後の課題」だと考えている。

(南部総局・内間健)

沖縄タイムス
27 ひと・まち 1版 2012年(平成24年) 9月 8日 土曜日

世代つなぐ新しい絆

ウチナーンチュと大正区の100年 ～与那原綱がつなぐ思い

綱から伝わる先人の思い (下)

「綱を掴んでいる僕の手を通して彼も、先人達も今ここ大正のグラウンドで一緒に曳いているんだと感じた時、僕の目からは汗にまみれた大粒の真珠がこぼれ落ちていました」

沖縄出身者でつくる「がじまるの会」メンバーの諸見里宗博さん(64)＝大阪市大正区在、旧美里村出身＝は「ああ、これはまさしく僕が書いたものです」と懐かしげに声を上げた。

2004年に「がじまるの会」の招きで、与那原大綱曳が初めて大正区で引かれた。諸見里さんは感謝の気持ちを伝えようと、開催後、与那原町役場のネット掲示板にメールを送った。その文章を当時の派遣実行委員会メンバー、上江洲安昌町議(63)が書き留めてあった。諸見里さんは今回の取材で、8年ぶりに自分の文章を目にし、当時の感動を呼び覚ました。

その文章には、38年前に集団就職で大阪へ来たことや大正区であった与那原大綱曳の綱に乗る「支度」の美しさに圧倒されながら、大綱を握ったことがつづられていた。

そして全身全霊で綱を引く間、30年間の思い出が走馬燈のように巡り、苦しみを抱えて亡くなった仲間や理解してくれた先人たちへの思いが交差した。

■ ■

さらにそのメールは、在阪とみられる与那原町出身の90歳の女性から届いた手紙についても触れている。「会場には来られなかったが、テレビを通して何十年ぶりに故郷の大綱曳を見て大感謝した」とつづられ、敬老の日に孫から贈られたという1万円が「予算の足しに」と同封されていた。

諸見里さんは「こういう思いを持った人がいることを与那原の人たちに伝えたかった。スタッフも少なく、十分な交流会もできずに帰してしまったから、心残りだった」と振り返った。

8年ぶりに自身の文章に触れ、大綱曳への思いを新たにした諸見里宗博さん(右)。取材に同席した妻の芳美さん(左)は初めて夫の文章を読み、感激した様子だった＝大阪市大正区、関西沖縄文庫

大正の地で、強く沖縄を意識し、普天間飛行場移設やオスプレイ配備計画など沖縄をめぐる状況に怒り、県民に共感してきた。迫る8年ぶりの与那原大綱曳に「あの感激を再び味わえる喜びは大きい」としみじみ。

今回は中学3年生の孫が、支度として大綱に乗る予定だ。諸見里さんは「世代を引き継いで、感じてくれることがあるのでは」と目を細める。

■ ■

大正区の筋原章博区長は「最初に沖縄の方々が大正区に来られて約100年、定住の決心をされて約80年。大正区80年の歴史は沖縄出身の方々が奮闘、努力されて発展させてくれた町の歴史そのもの」とたたえる。

大綱曳については「区民挙げ、与那原から来た人も大阪から来た人も、大阪・沖縄が一体となって綱を引く。明日の大正区を支える新しい絆が生まれる場になる」と期待をかけた。

(南部総局・内間健)